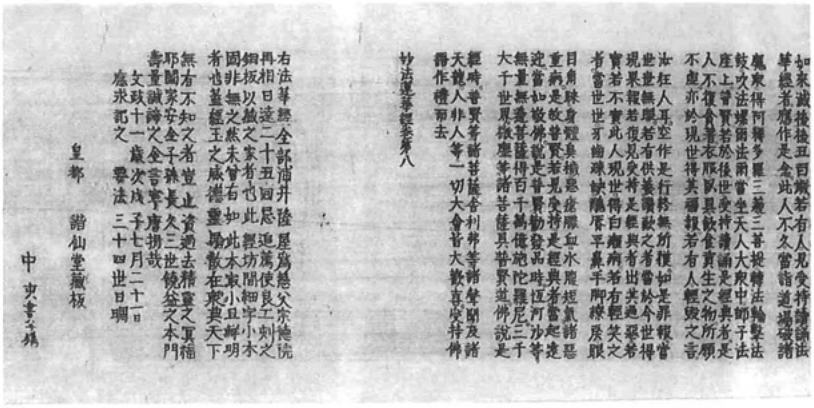
る微塵銅鐫経典の先駆的な役割を果たしている。その先例となるのが文政十一年の『妙法蓮華経』（番号6）〔図13〕で、天地五センチ余の薄葉紙に一行十七文字が鐫刻されており、それには巻子本と八帖からなる折帖（筆者未見）の二種類が存在している。『周易　上経下経』（番号7）は、その字彫りが繊細で美しすぎるので伊三郎作とは断定できないが、天保五年頃にこのような鐫刻が出来る銅版画師を他に想起し難い。それ故『三部仮名鈔』の挿絵「屠邉之櫪図」（番号43）と共に一覧に挙げておく。



13『妙法蓮華経』巻尾（原寸）と経巻

このように作品点数は必ずしも多くはない。しかし、この一覧を見渡すだけでも中伊三郎の京・大坂の銅版画における先駆的な位置を改めて確認することが出来よう。丸福の『判元』中にある作者不詳の作品を更に検証することによって、新たな伊三郎作品の発掘が可能かもしれない。

写真製版登場の頃――日本の印刷技術の転機

森　仁史

先般、皇室で着袴の儀が行われたと報道が流れ、マスコミは一様に「皇室行事」と説明した。同時に行われた深曾木の儀ともども武家に始まって商家がそれに倣って行ってきた行事であり、必ずしも皇室固有の行事ではないはずだ。筆者は一八六七年パリ万博に開成所画図掛が幕府の要請を請けて出品した油絵について、その写真資料を紹介したことがあるが、このなかに宮本三平筆『袴着』があり、画面から判断すると商家の母子を描いているように見えるので、幕末にはかなり一般的な行事だったに違いない。現在でも、群馬県太田市の世良田東照宮では深曾木の儀にきわめてよく似た七五三祈禱は誰でも行うことができる。人間はとかく目前の現象や言説に引きずられ、以前のことは忘れやすいものなのだろう。

人の目に触れやすい印刷においてすら同様のことは起きがちである。すでに木茂先生が一度『町田市国際版画美術館紀要』第四号（二〇〇〇年）に活版印刷に組み込まれて活用されていた木口木版の実態を紹介されたが、ここに架蔵の資料を追加して紹介したい。

『徒弟奨励会作品集』東京木版技業組合、大正十五年、和装、二三・六×一六・二センチ　四十八丁〔図1〕

まえがきには、「我が木版が、実用上から云つても、芸術上から見ても、決して忘れられてはならない技術であるのに、近来兎角振はないのは、誠に遺憾な事であるので、本年徒弟の技巧奨励の為め、展覧会を催し」たと記され、木版技術の水準を誇示し今後の垂範のため作品集としてまとめたもののようである。木版制作の世界に、このような養成システムがあるだ

1 『徒弟奨励会作品集』

2 金賞作品　加茂勝之助門人
田中庸晧（十八才）

3 銀賞作品　岡田清次郎門人　千田晴吉（十六才）

4 金賞作品　奥田滋二門人　山彦定一（十六才）

ろうことは承知していたが、具体的にどんな内容であるかはこの冊子によって初めて知ることができた。全体を見渡して、模写や複写の技術を若い画工がきわめて短期間のうちに習得している実態が分かって驚かされた。

図版〔図2・3〕は金賞（田中）と銀賞（千田）の模写作品である。前者は右下にK. HIROSHIMAとサインがあり、廣島晃甫の作品であろうか。大正十五年といえば、すでに廣島は帝展作家として地歩を固めていたから、このような習作の題材に取り上げられたのかもしれない。後者は小堀鞆音の作品で伸びやかな描線が見事に再現されている。この時代の木口木版は彫れるものであれば、何にでも使われたので、毛筆〔図4〕の再現や、初号以上の大きさの文字の出品もある。

本書には四十九点の受賞作品が袋綴じの和紙に刷られて収録されている。内訳は金賞三点、銀賞四点、銅賞十二点で、審査総長を正木直彦が務め、審査長は組合頭取田村乙之助であった。入賞者の平均年齢は十七歳十ヵ月弱で、修行年数はほぼ二年となっている。もちろん例外もいて、二十八歳で半月しか修行せずに銅賞を獲得している者もいる。しかし、二十歳以上は全体の二十二％しかいない。平均すると、十五歳くらいに入門して二年間くらい徒弟修行していることになる。おそらく、高等小学校を修了した少年たちが版画工房に住み込みで働き、筋の良い徒弟がいずれ一人前になる路を歩むということであろうか。

このような境遇を知ると、思い出されるのが山田耕筰の少年時代である。『はるかなり青春のしらべ』（かのう書房、昭和六十年　中公文庫、一九九六年）を読むと、山田は明治二十九年、十歳で父を亡くし、田村直臣が巣鴨に運営する自営館と名づけられた活版印刷工場で住み込みで働くことになる。始めは印刷物の配達だったが、器用な山田は文選の補助に酷使されたと記している。山田の左手が不自由になったのはこの時期昼休みに熱中していた鉄棒の着地に失敗したからだった。田村はこうした徒弟に夜学などで就学の機会を与えようとしていた。和田英作も山田の先輩に当たるようだ。和田の父秀豊は垂水から上京し、慶應義塾に学ぶ頃受洗していたが、スコットランド一致長老教会で英作を幼児受洗させている。

「写真製版と新らしいカット」上澤写真製版所、〔昭和十一年頃〕、B5判、二十八頁〔図5〕

版画に取って代わったのは写真製版であるが、これは創業十五年の「製版界では最も老舗」を自認する製版所（芝区田村町四丁目）のパンフレットである。ちょうど先の資料で慨嘆するのと入れ違いに、起業したことになる。この当時は専門業者はまだ少なかったとみえて、製版を依頼する地方の顧客が三百数十軒あり、「御註文の製版はドシ〳〵運賃立替で送」っていると誇らしげに記されている。こうした状況であるからこそ、それ相応のパンフレットが必要とされていたのだろう。

屋上で記念撮影している十数名のスタッフを見ると、中年職工に交じって詰襟服の少年が並んでいる。また、この当時はスタジオ撮影写真と同様に撮影した印画を修正することは当然であり、ここでも年配の技術者が作業に当たっているのが写し取られている〔図6右下〕。

また、同じ技術をつかって既成品として凸版カットも販売しており、人の顔、四季、スポーツ、草花、農事、儀礼に見出し、飾り罫が四百五十種掲載され、注文に応ずる態勢になっている。さらにこのほか、四十八種の地紋も販売している。近世から明治前半に印刷業者が引き札を販売していたが、こうした製版業が肩代わりしようとする趨勢を物語っている。

5・6「写真製版と新らしいカット」（上澤写真製版所）表紙と図版

『米僊画帖』壱―参、小川写真製版所、明治三十三年、二四・〇×一六・三センチ、十九、十五、十五丁〔図7〕

木版に次いで採用されたのがコロタイプ印刷である。本資料は久保田米僊の明治三十年制作の作品〔図8〕を集めたもので、和紙にコロタイプ印刷し袋綴じにしている。三分冊をボール紙に布を貼った帙に収め、定法どおりの爪が付けられている。石版印刷による題箋が貼られ、製本形態として、近世から近代に差し掛かることを示すきわめて過渡的な形式になっているところが時代と作家の位置を表していて興味深い。

アメリカ合衆国に渡ってコロタイプ技術を学んだ小川一真が制作に当たったのだが、出版前に米僊を訪ねて彼の経歴を尋ねた。この内容が形式的な履歴を記すよりも面白いと判断して、作品集の冒頭に口語体のまま掲載している。これまでに米僊は明治二十二年パリ、二十六年シカゴ万博のルポルタージュ画で評判となっていたのだが、これらの画集はすべて木版で複製されたのに対して、このときの作品集ばかりが写真を応用したコロタイプであることは彼もまた時代の変わり目を生きてきたことを象徴しているようだ。

またこうした商業的活動以外に、宮内省の求めに応じて、明治宮殿の湯殿杉戸（《金衣百子の図》、《不老長春の図》）、を描いたと言い、これは風呂に不老をかけた明治天皇の発意だったと明かしている。同じく西御化粧の間格天井に草花八十二枚を制作したと語っている。

この作品集がつくられたとき米僊は四十九歳だったが、三年前に石川県工業学校教諭として金沢に赴任してから眼を患い、このインタビューの行われた六月には高名な眼科医の治療を受けているので「多分遠からず、全癒するであらうと信じて」いたが、この年の内に失明してしまう。

明治十六年に第一回絵画共進会が開催されるとき、「京都の画家は趣意が分からんと云ふので、出品しないのを私が説き廻つて、さすやうにしました」と回顧している。この展覧会は日本の美術が大きくナショナリズムに舵を切り、洋画を排除したこととあわせて、出品作を額に表装することを強要したことで画期的な意味があった。つまり、技法は伝来の流派そのままでありながら形態は洋風の絵画概念に則るという偽装態だったのだ。この隘路から日本絵画の行く先を見出そうという米僊は確かに開明派といわなくてはならないが、それにしては寂しい晩年だったと言わざるを得ない。

『日本の印刷工業　附国産朝日式電光輪転機解説』（朝日新聞社）、昭和六年、二二・二×一五・三センチ、四十頁〔図9〕

最初の資料が近世以来の木版制作の末尾に連なる和製技術の近代システムにおける存続形態であるとすれば、明治末年の写真版技術の導入と普及は全く近代的な新しい製版技術であり、これによって木版はきわめて狭い活動領域に追いやられることになった。ジャーナリズム、とりわけ新聞は事実報道のために写真掲載のメリットを最大限に生かすことのできるメディアであった。

本資料は冒頭に印刷局印刷部長矢野道也「印刷の話」を収録し、古代の陀羅尼から昭和のオフセット版に至る印刷の歩みと印刷技術の解説をなし、後半に東京朝日新聞社印刷局技術部長江碕達夫による同社輪転印刷機の模型解説を収録している。矢野は明治三十年東京帝国大学工科大学応用化学科を卒業してからずっと印刷局に奉職し、明治四十―四十一年欧米出張を命ぜられ、日本の印刷技術革新に貢献した技術者である。彼は東京工業学校工業図案科（明治四十三年～）、東京美術学校（大正三年～）で教壇にも立ち、永く印刷技術の指導者として活躍した。これは時代が矢野の担った新技術を求めていたからに違いない。こうした業績ゆえに、印刷局創立八十周年には記念事業として彼の伝記、『矢野道也伝記竝論文集』（大蔵省印刷局、昭和三十一年）が刊行されている。

矢野の文章を通読して改めて感じたのは印刷速度の長足の進歩である。十五世紀にヨーロッパに木製活版印刷機が登場したときには、一時間で三十五枚だった印刷速度が十九世紀に鉄製手引機が登場して十倍となり、五

7・8 『米僊画帖』帙・表紙と明治30年の作品

9　『日本の印刷工業　附国産朝日式電光輪転機解説』

十年後に筒型印刷機が一万枚を刷るようになった。さらに、一九二二年に高速度輪転機が八万枚、十年後には十五万枚を可能としている。とくに十九世紀末からの五十年間に十五倍という驚異的な速さになっている。これは同時に人々が共有する情報量の膨張でもあったはずだ。もちろん、これら総ては商業的に世に出て、印刷物として消費されたのだから、受容する側がこれだけ飛躍的な情報を求めていたことがもっと重要だろう。印刷はその橋渡しをしているに過ぎないのであって、受け渡しされる情報の内容と質が問題なのだ。なぜなら、これらこそが歴史を押し動かしていったからだ。そして我らもその流れのなかにいるのである。

吉川霊華のこと

山田　俊幸

八月の終わりから、九月、十月と、けがの入院で寝たまま状態で、方丈どころか手の届くところにしか情報のない時間がずいぶん続いた。そんなとき、丸橋茂幸さんが『視覚の現場・四季の綻び』という雑誌の第十号をもってきてくれた。丸橋さんが、関東大震災について書いている号だが、中に吉川霊華について書いてあったのが目についた。

吉川霊華は魅力的な日本画家で、その線描の美しさは比類がない。たしか鏑木清方の文章で名を知り、たまたまデパートの古本市で出会ったのは幸運だった。場所は銀座の松坂屋。少し前に知り合った丹波屋さんという書画屋さんに出たのだと思う（と、書いたのだが、どうやら記憶違いかもしれない）。丹波屋さんは京都の書画屋さんで、そこからは、富田渓仙を買っていた。霊華の画題は、重苦しい気だるい気分に満たされた琵琶を弾く貴人の絵で、けっして元気の出る絵ではない。だが、よいもののようにわたしには感じられた。自画自題の共箱で、いかにも霊華らしい題がついていたが、病院暮らしでは今は確認できない。

わたしはそんなものを皮切りに、当時はあまり見向きもされなかった霊華を、目録に出るたびにぽつぽつ買い集めていった。買えたのは競争相手もいなかったからだ。

それと同時に、霊華が私淑したという冷泉為恭、浮田一蕙などにも興味が行き、資料も集め、読み始めた。というのは、当時、大和絵は人気が薄くなっていたとはいっても、為恭はさすがにビッグ・ネーム。いいものなどは、まったくお呼びでない値段だった。軸などからは、鼻もひっかけられなかった。ただ、この大和絵ではたった一つ、浮田一蕙の写しらしい

一寸

第四十八号　二〇一一年十一月

第四十八号目次

新・旧刊案内48　『追遠会誌』と冬崖の地図（1）　青木　茂　1
鈴木錦泉―明治講談本木版口絵随一の画家―　岩切信一郎　7
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（4）　大谷　芳久　15
図画教育者列伝（四）　武村耕靄（その一）　金子　一夫　47
「風流夢譚」事件の右翼関係動向資料（その2）　丹尾　安典　51
唐物店丸福の『判元』帖から（二）　森　登　59
中伊三郎の銅版画　銅・石版画遺聞43
写真製版登場の頃――日本の印刷技術の転機　森　仁史　67
吉川霊華のこと　山田　俊幸　71
『一寸』第四十一号～第四十八号　目次　75
執筆者別目次　第三十三号～第四十八号　77

新・旧刊案内48　『追遠会誌』と冬崖の地図（1）

青木　茂

現存する冬崖の洋風画は『追遠会誌』の挿絵だけだ、と書いたために『追遠会誌』について書かねばならぬ。同人誌は自分にだけ責任をとればいい（?）ため、僕は「続きはいずれ」「これについては次号に」「稿を改め」などとして、熱が冷めたり忘れたりして例えば『自筆本　魯庵随筆』なども尻切れとんぼである。

大槻玄沢・号は磐水（宝暦七年―文政十年）の歿後五十年を記念して明治九年（一八七六）九月二十八日に開かれた追遠会の事ども をその孫大槻修二が編輯し出版したのが『追遠会誌』である。本誌先号に僕はこの半紙本（二二・八×一五・七センチ）の出版御届日明治十年四月二十三日の四月の文字を脱落させたまま印刷した、詫びて訂正する。それには袋・表紙・扉・冬崖挿絵二点を写真版として掲載したので参照されたい。ところで僕がいつの頃から東京古書会館へ通うようになったのかは不明だが、一九七七年九月九・十日の愛書会の目録があり、友愛書房が『大槻磐水追遠会誌完』を出品していて売価は十三万円とある。わざわざこんな目録が今だに手許にあるのは余程うれしかったに相違ない。しかも僕のは袋付である。その前後に入手したのだろうが、いつ・どこで・いくらで・は全く記憶にない、安かったに決っている。当時、友愛書房はキリシタン関係の珍本・稀籍や明治初期本を多く出品していて売価も高額であり、僕などはどこから集めたか不思議に思うばかりで近寄りがたく、神保町から水道橋への白山通りの右側は古本屋さんもあまりないし、歩かなかったものである。その目録をみても大槻玄沢の『蘭学階梯』二冊は二十八万で『磐水存響』二冊揃は四万五千円である、ヘボンの『さいわいのおとづれ　わらべてびき